

がん社会 を診る

中川 恵一

小林麻央さんの若い命を奪った乳がんは、がんのなかでは比較的夕チのよい部類に入ります。「全国がんセンター協議会」の集計データによると、乳がんの5年生存率は全体で92・9%です。ステージ2の患者だけでは95・2%、かなり進行したステージ3では79・5%です。膀胱(すいぞう)がんでではステージ1でも40・5%ですから、乳がんがいかに治りやすいタイプであるかが分かります。

ただし、彼女のブログやこれまでの報道から推測すると、適切な治療が提供されなかった可能性があるようにもみえます。麻央さんも2016年9月4日のブログでこうつぶっています。

「私も後悔していること、あります。あのとき、もっと自分の身体を大切にすればよかった。あのとき、もうひとつ病院に行けばよかった。あ

後悔しない治療の選択を

のとき、信じなければよかった。あのとき、、、あのとき、、、」もちろん、彼女の治療に直接関わったわけではありませんし、推測でモノをいうのも慎むべきかもしれませんが、ブログには、後悔の気持ちとともに、自分のつらい経験を他の人にさせたくないという思いが感じられます。

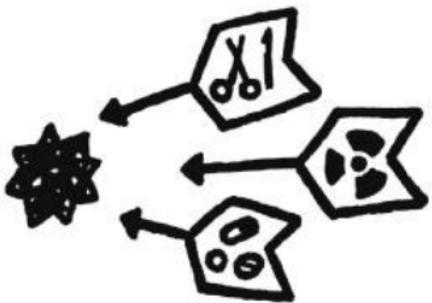
通常の経過であれば、麻央さんには「標準治療」が勧められたはずですが。標準治療とみると、「ふつうの治療」、「並みの治療」のように思えるかもしれませんが、英語の“Standard therapy”を日本語訳したものです。簡単にいえば、現時点での「最善・最良の治療」のことになります。

標準治療は、がんのタイプや進行度をもとに、手術、放射線治療、薬物療法を適切に組み合わせ治療していくものです。がんの専門医が使う診療ガイドラインにも標準治療が優先して記載されています。

乳がんでは、部分切除と放射線治療を組み合わせた「乳房温存療法」が標準治療の代表ですし、病巣が大きい場合、抗がん剤を先に投与してがんを縮小させてから温存療法を行うという選択肢もあります。全摘が必要な場合でも再建手術を保険で受けることもできます。

がんの治療は例外はありませんが、「敗者復活戦のない一発勝負」という面があります。後悔のないよう、標準治療を選択することが基本です。

(東京大学病院准教授)



イラスト・中村 久美